

## 武蔵野日曜聖書講筵 復活節祈禱会

## 人の子枕する所なし

——ルカ伝第9章51～62節——

1981年4月19日

小池辰雄

神の腕枕 十字架において私は棄てられてある 死者は葬儀屋に任せろ 聖書は読むことが直ちに祈り もう問題がない 祈り

## 【ルカ9・51～62】

51 イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし、<sup>52</sup> 己に先だちて使を遣したもう。彼ら往きてイエスの為に備をなさんとて、サマリヤ人の或村に入りしに、<sup>53</sup> 村人そのエルサレムに向かいて行き給うさまなるが故に、イエスを受けず、<sup>54</sup> 弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言う『主よ、我らが天より火を呼び下して彼らを滅ぼすことを欲し給うか』<sup>55</sup> イエス顧みて彼らを戒め、<sup>56</sup> 遂に相共に他の村に往きたもう。

<sup>57</sup> 途を往くとき、或人イエスに言う『何処に行き給うとも我は従わん』<sup>58</sup> イエス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は塹あり、されど人の子は枕する所なし』<sup>59</sup> また或人に言いたもう『我に従え』かれ言う『まず往きて我が父を葬ることを許し給え』<sup>60</sup> イエス言いたもう『死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、汝は往きて神の国を言い弘めよ』<sup>61</sup> また或人いう『主よ、我なんじに従わん、されど先ず家の者に別を告ぐることを許し給え』<sup>62</sup> イエス言いたもう『手を鋤につけてのち後を顧みる者は、神の国に適う者にあらず』

## ●神の腕枕

復活節の最後の段階に来ましたが、これが一番——一番ということもありませんけれども——締めくくりとして非常に大事なところですから、皆さん、どうぞ深く祈り入ってください。さつき読んでいただいたところは、ガリラヤからエルサレムに向かうその断然たるところなんです。非常に大事なところ。ルカ伝は9章の今の51節から19章の27節までがエルサレムへの途です。

<sup>51</sup> イエス天に挙げらるる時満ちんとしたれば、はつきり十字架を通って天界に行かれる。

御顔を堅くエルサレムに向けて進まんとし、



もう左顧右眊さこうべんしない。エルサレムに向かって邁進まいしん。これは本当の勇者です。

「千万人といえども我往かん」

と孔子が言いましたが、キリスト者はいざとなったら本当の勇氣をもつ勇者でなければならぬわけです。なにか「キリスト者」というものは、ただ柔和で弱々しいものではない。ひれふへりくだ平伏し謙りにおいては、本当の平伏し謙りです。

「柔和」というのは従順ということ。神に絶対に信頼して従うことが柔和という言葉でいわれているが、ややもすると、柔和という言葉がちよつと狭くなりすぎる。神に絶対に服従——「服従」という言葉はなにか多少堅つ苦しい言葉ですが——信頼して、信従すると言ったらいいかも知れません。信じ従う。「信従」という熟語もある。そういう人が本当の勇者となる。女性道が本当の男性道をもっているということ。52

52 己に先だちて使を遣したもう。彼ら往きてイエスの為そなえに備をなさんとて、

サマリヤ人の或村あるに入りしに、53 村人そのエルサレムに向かいて往き給うさ

まなるが故に、イエスを受けず、

サマリヤとは仲が悪いものですから。

54 弟子のヤコブ、ヨハネ、これを見て言う『主よ、我らが天より火を呼び下

して彼らを滅ぼすことを欲し給うか』

非常に憤慨して、

「やっつけてしまったらどうですか」

というわけです。この「火を呼び下して」というのは、エリヤのように火を呼び下したことを思いだして言っているに相違ない。

55 イエス顧みて彼らを戒め、56 遂に相共に他の村に往きたもう。

そこは避けられた。

57 途を往くとき、或人イエスに言う『何処どこに往き給うとも我は従わん』58 イ

エス言いたもう『狐は穴あり、空の鳥は罅ねぐらあり、されど人の子は枕する所なし』

「或る人」というのはペテロではない。

「狐は穴あり、空の鳥は罅あり」

と。キリストはなかなか詩人的な言い方をなさる。「人の子」というのは自分のことで、「メシヤ」の隠語です。

「メシヤは、人の子は枕する所がない」

という。地上はみなこれ仮かりの幕屋、仮の枕、仮寝かりねだというわけです。ところが、枕する所のない人は至る所を枕とします。いわゆる一定の枕する所なんていうようなことではないと。いづこも即ち神さまの枕である。寝る所は、舟板を枕とする、その舟板を枕とする所は神の永遠の腕です。神の腕枕だ。神の腕枕でもって寝るわけだ。



## ●十字架において私は棄てられてある

59 また或人に言いたもう『我に従え』

「ついて来い」と。キリストに従うときには、己を棄てなければ従えない。キリストの道は、己を棄てなければ従えない。己を棄てると、今度は本当にキリストの力が従わしめる。キリストの力が引つ張って行く。従おうとしなくなつて、自然に。では、

「己を棄てることは如何にして可能か」

申し上げるまでもなく、十字架においてです。十字架において私は棄てられてあります。

私は昨日、夢の中で——夢とも現でもないね——本当に冥想したね、十字架を。そうしたら、もの凄く痺れてしまった。

「十字架は贖罪である」

という命題が分かつたつてダメですよ。現実には、時々本当に現実に受けとらないと。そうしたらもう、そこが聖霊の来る場所なのでね、

「十字架をぬかして聖霊の来る場所はない」

ですから。いいですか。こういうことをはつきり言う人がないんです。

十字架でもう自分がすつとばされ、贖われたところには、聖霊がウワツと臨んでくる。

「聖霊とは何ですか?」

なんてなことではないですよ。いいですか、絶対に。皆さんは、今日の祈禱会では、十字架が本当に自分に化体し、その現実を本当に受けとつて——力みではないですよ——自分がすつとんでごらん。そうしたらもう「聖霊が」俄然くるから。

「自分が無になる、自分がどうするか」

とかいう、そんないわゆる自分の精神状態ではないですよ。

「我に従え」

と。キリストについて行かざるを得ない。これが本当の道なんです、キリストに従うところが。それが本当の自由の道なんです。己の自由に死ぬところに本当の自由がくる。

„Der Freiheit Tot, der ist der Freiheit Leben.“

「自由に死ぬこと、自由の死が自由の生命である」

というドイツ語がある。そこから言っているような「自由」は、何も自由ではない。十字架道。即道、道に即することです。

「我に従え」と言われて」そうしたらば、無条件に「はい」と言わない。

「ケン、ケン」

と言わない。「ケン、ケン」というのはへブライ語で

「然り、然り」

ということ。もう少しキジになつた方がいい。

かれ言う『まず往きて我が父を葬ることを許し給え』



あの饗宴にあずかる時にも、何のかんのと理屈を言っ、やって来なかつたでしょ。あれもルカ伝に出ている(ルカ14・16～24)。饗宴に招いたところが、

「まだこういうわけで、牛を買いましたのでどうのこうの、結婚しましたのでどうのこうの」

と色々なことを言っ、饗宴を断る。聖国に招かれる者は皆これを拒んで、却っ、別な、

「籬まがきの外の通りがかりの人が先に天国へ入っ、てしまっ、うぞ」

と、いうことす。

### ●死者は葬儀屋に任せろ

60 イエス言いたも『死にたる者に、その死にたる者を葬らせ、

これは訳が分らないものだから、いろんなことをいっ、て注釈する。注釈をみてると面白よ。非常に深遠に何か解釈する。キリストはそんなことを言っ、たのではない。

「ミッターにミッターは任せろ」

と、いう。「ミッター」というのは葬儀屋、「ミッター」は死者。ヘブライ語は母音がないから、それをギリシア語になおすときに両方とも「死者」にしてしまっ、た。間違えた。これは明らかにそうすね。

「死人は葬儀屋に任せよ。お前は神の国を伝えよ」

と。「死者は葬儀屋に任せろ」ということ。

汝は往きて神の国を言ひろい弘ひろめよ<sup>61</sup> また或人わかれいひろう『主よ、我なんじに従わん、

されど先ず家の者に別わかれを告つぐることを許し給え』

これはまあ大体、常識だよね。「キリストは非常識か」と、こう思っ、うわけす。

62 イエス言いたも『手すきを鋤すきにつけてのち後すきを顧すきみる者は、神の国かなに適かなう者  
にあらず』

だから、キリストの真理の次元は強烈な次元す。

「非常識なことをどしどしやれ」

と、そういうことではない。そういうことではないすけれども、ある時はもうそういうことは踏み破っ、て行かなければダメだという。

「大事な時に常識的なことを言っ、たのではおしまいだ」

と、いうこと。

ギリギリな時点というものがある。その時に、人生には永遠をつかむ瞬間がある。その瞬間をのがすという、と、なかなかまた来ない。これは大事なことなんすよ。

「カイロスを知れ」

と、いうこと。そういう大事な時は、もうそんな相対的な大事なものとはおよそ違っ、うんす。次元が。そのようにして突っ、き進んで行く人が本当の人生の勝利者になる。



どうぞ、そこはいつも祈り心で、キリストにつかまえられて行かないとね。

### ●聖書は読むことが直ちに祈り

私はこのルカ伝のひとつくだけは大好きなところです。しかし、私はこのカイロスをしぼしば見失ったしょうがない男です。けれども、もう時々その人生の峠はいくつか乗り切つて来ました。こないだのイスラエルの旅行「1981/3/21～4/2」聖地旅行に諸教団混成22名の团长として行く」もひとつの峠でした。

「その真珠を買うためには、他のものをみんな売つても、その一つの真珠を買う。それが天国だ」

とキリストは言われたでしょ。そういうようなことです。キリストの譬えというのは面白いですが、本当に。そのキリストの譬話の気合を受けとっていかないとね。いわゆる理屈ではないですから。いいですか。もうそれは、福音の世界は、

「今、ここにおいて」

という世界ですから、明日ではないです、「そのうちに」ではない。そういう、まっしぐらに左顧右眊することなく、右左を考えたり、後ろを見たりするようなことではないと。一途いちずに前に向かって——パウロがピリピ書で言っているとおり——猛進、驀進ぼくしんする。その驀進の力は、この十字架によつてすつ飛ばされたところにくる聖霊なんです。これが驀進の力です。

もうね、福音書のキリストは桁違いの靈止ひとですから。これにしがみついて、その力がきたら、もう勝負あります。それを実証しているのが使徒行伝ですから。もう大変なもんです、この新約聖書というのは。それを、

「聖書研究会だ。ギリシア語だへブライ語だ。この意味はどうだ。聖書のどこにと  
ういう意味がある」

なんてやって、もう七面倒くさいことをやっているのはご苦労さんはなしだ。そんな、  
「研究しろ」

なんて、キリストは一遍も言ったことはない。いいですか、皆さん、もう本当に簡単なんです。この聖書というのは形容詞がない——文法的な形容詞なんてものは形容詞ではない——もう語りきれないで困っている書なんです、この文字が。文字をはみ出してしょうがない現実なんです。そういう気合で読んでくださいよ。そうしたら、楽しくてしょうがないですよ、聖書は。読んでいるうちに力が来るから。

読んでいるうちに力がくる。本当のいい集会はもう、読んで、読むことが直ちに祈りになつて、私は何も言わないで、

「アーメン、ハレルヤー！」

と、どんだん歌つていく、なんてな集会をやりたいですよ。だから、私がない時は、



あなた方は一番いい集会ができるんだ。聖書を読んで祈っていく。それが一番いい集会。時々、私が行くというと、水を割るようなことになる。まあそれくらいに思っていてやってください。私は正直、自分を何ものとも思っていないから。

「何者か」

なんて思ったら、私はダメになりますからはつきり。

そういう事態です。今までにこれだけ積みかけて力ある讃美歌を誰が作ったですか。キリストの力ではないですか。私は讃美歌集でそういうことを聞いたことがない。私は自分を誉めているのも何でもありません。キリストがなし給うから。もうペンテコステの前には必ずペンテコステの歌ができるでしょう。すごいことができるでしょう。まあそんなことで、何も不安がないです。「A 24 「ゴルゴダの丘の」(1981.5.5作)——ペンテコステの歌——」

●もう問題がない

ルカ伝の今の、一緒に読んだところは素晴らしいところです。

62 イエス言いたもう『手を鋤すきにつけてのち後を顧みる者は、神の国に適かなう者

にあらず』

「とりかかったら、それに打ち込め」

と。仕事に取りかかると、何時になっても眠くなくなってしまう。祈りは力を与えますから。まあ昨日の晩みたい——あれはどれくらいの間だったかな——とにかく全身がもう痺れてしまって、誰かそこにいたら接手してやりたかったな。どうぞ、ひたむきに。

「我よりも何々を愛する者は我にふさわしからず」

とキリストは言った。

「己をも憎まずば我が弟子となることができない」

と。烈しい言葉ですね。誰が己を憎むことができるですか。

「己を棄ててかからねば、己を憎まずば」

と。「こんな者は何だ」といって自己を乗り越えていく。それは自己の力ではないですよ。私たちが自己を乗り越えるのは。それは本当に聖霊なんです。こんな相対的な自分なんかにかかずらわっていたら、本当のことは出来やしませんよ。

マルチン・ルターが聖書を訳した時に、自分の名前を始めは書かなかった。

「これは神さまの書である」

と。あとから書きました。

何も外側に表れなくても、皆さん一人ひとりキリストに在るときには、一人ひとりが人間国宝なんです。いいですか、天下一品なんです…(異言)…いいですね、そういう気合でやってくださいよ。とにかくもう、それが純一無雑のところに入ってきますから。もう楽しくてしょうがないです。



日本の精神史を本当に嗣ぐものは、この原始の福音に、使徒たちの信仰に直結して、キリストに直結する、そういう民だけです。それはどこの団体というのではない。どこの教会にしようと、カトリックであろうと、プロテスタントであろうと、どこであろうと、本当にそういうひとは神の国を築いている霊止ひとなんです。神さまにはわかつている。どうぞ、皆さん、人の目にはどう見えようといひです。キリストが、

「われ汝を知る」

「汝はわが愛しむ子なり」

と言われる。それは自分がどうかではないですよ。本当に十字架と聖霊を受けたら、その声が響いてきますから。本当ですよ。私は自分の価値のゆえに、神・キリストに愛されようとするならば、私はもう絶望だ。そんな人間ではないんだ、私は。パウロが、

「我は罪びとの首だかしら」

と言ったが、私も同じ罪びとの首です。けれども、アウグスティヌスにしろ、アッシジのフランシスにしろ、みんな脱線したりいろんなことの歴史をもっている。けれども、彼らは本当にキリストにつかまったら、えらいことになった。

よく、「聖徒」というけれども、キリストの他に聖徒なんて本当はいないんだよ。聖者はエホバの神さまとキリストだけ。カトリックで「聖人」なんていうのは、私はあまり感心しないんだ。「贖われたる聖徒」ならわかつている。パウロが、

「義人なし、一人だになし」

と言った。すべては罪びとである。しかし、その私たちの罪びとかしらの首になったのは、キリストが首になった。それが十字架なんです。だから、

「私は〔罪びとの首となって罪を〕全部引き受けたんだ」

と。もう問題がないんですよ、正直。皆さん、何か問題を考えているんですか。

「私はそれでもまだこうです。これからもう少しはよくなります」

とか、そんなことを問題にしているんですか。絶対無条件の恩寵がこの十字架であるならば、ガタツとそこで倒れる。すると、ガタツと今度は聖霊がくる。そういう実に簡単明瞭の世界です。それを本当に、深山でも幽谷でも曠野でもどこでもいいから、ある時本当に一人で体験してごらん下さい。あるいは数人でもいい。今年はU君が、

「先生、断食の祈禱をしたいと思うから、やってください」

なんて言ってきています。断食が何かではないけれども、とにかく相對界に絶した世界に入らなければ。そうして、ひとたびその聖霊の著しい体験をすると、もう凄こわいことになる。私は阿蘇で、また八溝山やみぞで、もう一遍は自分の家で、三回経験しています。自分の家です。というのは、

「幸いなるかな、霊の貧しき者、天国はその人の有ものなり」

と、これを本当に受けとった時です。



もうね、私は水を割ったことを言えないんです、正直、申し訳ないけれども。ですから、どうぞ、何も恐いことでもなんでもない。もう有り難くてしようがないです。

このルカ伝の19章51節から62節はそういう大事なところだということです。至る所をキリストの御腕を枕として寝る。キリストの御懐の中に寝てしまふ。

「私は眠れません」

なんて言ったら、承知しないぞ。

「キリストの懐の中に入って寝てください。どうして眠れないんですか」と。いつどこでもキリストは寝れた。

「何時間でなければどうだ。何時から何時まででなければどうだ」

とか、そんなことはもう全部超越した世界に入る。ね、楽しいですよ、本当に。楽でしようがない。

## ● 祈り

それでは、祈りましょう。私が始めに祈りまして、また最後に祈りますけれども。それから、幾人かの人に祈っていただいたり、あるいは自由に祈ったり。祈り入ることです。自分を投げ身することです。キリストの中に入ったら、何を祈っても大丈夫ですよ、お願いすることがあつたら。必ず根源の現実で聴かれています、聖名のゆえに。それがいつ現象するかはキリストの側のはなし。

「現象しないから、私の祈りはまだ足りないんだ」

と、そういうような判断をしてはいけません。いいですね。

驚くべきキリストさま。あなたはこのマタイ・マルコ・ルカ・ヨハネ、この福音書に盛りきれないような現実を歩かれました。実に世界で一番驚くべき書はこの四福音書です。この四巻は、私たちは聖書をひっちゃぶいても、ポケットに入れても、これを本当に体につけて身読するところの、いかなる食物よりも大事な食物であることを、魂を活かすところのあなたの霊であり生命であることをしみじみと感じます。私たちはそのような聖書の読み方を本当にやっていきます。驚嘆驚倒しながら読みしめられていきます。あなたに平伏す時に、降参する時に、その現実の中に入れられることを受けとって感謝いたします。あなたの烈しい言葉が逆に私たちに力となります。感謝いたします。こんな驚くべき、

「神の国は力である」

とパウロが言ったのはそのことです。パウロはあのように傲慢な奴でしたが、あなたに引っくり返されて、本当に

「我が目より鱗うろこの如きもの落ちたり」

と、全く平伏しました。十字架が立ちました。御霊が来ました。そして、彼は本当に、「我はキリストの僕である」



と、当時の世界を、あらゆる患難を乗り切って伝道しました。驚くべき実存です。聖霊によるところの事態です。

使徒行伝またパウロの書簡、ペテロの書簡、誠に目が覚めて、これを読むようになりました。感謝致します。この兄弟姉妹たち、私たちの魂はそれ以下のものでは本当は飲むことができないうように造られています。そのような具合に私たちの魂はあなたの直々に接するまでは、本当の力も来ないようにできています。感謝致します。そのような福音を、あなたは天界でパウロたちも呻いています。聖霊の呻きを感じます。どうぞ、私たちが聖霊の呻きを喜びに変えることができますように、いよいよあなたの十字架を体で受けとり、

「われキリストと共に十字架せられたり。最早われ生くるにあらず、キリストわが中に在りて生き給うなり」

と。主イエス・キリストさま、本当に御霊のあなたが私たちの中に生きて下さって、こんな嬉しいことはありません。

どうぞ、兄弟姉妹たちがこのことを毎日毎日深く祈り、そしてあなたの中に祈り入り、「ああなるほど、そういうことであつたか」

と、いよいよ限りなく身に受けとつていくことができますようにお願いいたします。あなたの力は限りなく展開していきます。このようにして、私たちは本当にうれいことです。この復活節に私たちもまた甦りの力をいただき、本当に復活の事態に帰らしめられたことを感謝いたします。

今日はまた京都でも大阪でも、それから所々方々の召団において皆このようにしてこの日を朝から晩まで過ごしていると思いますが、どうぞ、彼らの上にいよいよ力を与えてくださる様に願ひ奉ります。

今日はまた、珍しい方々が幾人も来られましたが、神さま、のつぴきならぬこの永遠のひと時を戴いたことを感謝し、聖名を讃え奉ります。どうぞ、これからのしばらくの祈りの時をいよいよあなたが親しく臨んでくださる様に願ひ奉ります。

今、心からの感謝と讃美、兄弟姉妹たちのそれと共に聖名により捧げ奉る。アーメン。

